



書同卷万似合簿人  
四

2875  
13





へ 13  
2875

門へ 13  
號 2875  
卷

年  
1004



旧  
利 13  
1004

拍



和原道同書曰く巻

古切り舊其事 浩東麻ヶ名 秀ヶ名述



たうそか人々とのつらさふとたうすあけよて  
身のとつらさふざらと夫よわちぐやちとあれは  
とすおとわらそふれとていふ事といふ物事なり  
香くはがりて三寸ははるざらり程するごとくワガ  
つてあつとつりなず人のさくを移していふ事なり  
うふ子よなる人々をいむおはあが色より人々をそこ  
かいををさうて正法をも破滅する災は招き  
ある友よか人々のつらさふざら事又神のせい  
ましめたりむしげきよいふ事なり此すまか

和原道同書曰く



まうしけりと雀が縁がうらなを雀の舌をさうて  
いかにこれバ祖父がかりてを雀と存移り  
あらまうしけりと雀が縁がうらなを雀の舌をさうて  
澤北法なり法を土代はけりといひしゆへ  
又法を祖よしとてうらなを雀の舌をさうて  
まうしけりと雀が縁がうらなを雀の舌をさうて  
秘并家及此奥義秘授事なむとて  
と法はま倫のけりとならんといひしゆへ  
雀後といふなり舌と切さるるをけりといひしゆへ  
雲なりかくれごとく神祕をうくまはるる人を神  
明とて母の一子を思ふがごとくちのふくして

ふくして雀の縁がうらなを雀の舌をさうて  
此法をなれぬまうしけりと雀の縁がうらなを雀の舌をさうて  
あらんといふなり舌と切さるるをけりといひしゆへ  
法を雀とてあまはれ羽衣なりといひしゆへ  
母といひておひ志きりなん  
雀を大まはれしけりし業此の毎唯祖父といふ  
をつくす哉時を雀の縁がうらなを雀の舌をさうて  
切れ散るる文書も移るるは祖父の縁がうらなを雀の舌をさうて  
祖父は此事とてけり風狂なりといひしゆへ  
ていふやう母を法するまうしけりと雀の縁がうらなを雀の舌をさうて  
母を祖の一人とて我祖をてゆくとて母を祖の一人とて







木下 忠房 画



茶室

茶室







縁右のふやう世多々く知父を此う苦あり能く是を  
あてて神より和尙にあんどがいれしといふも  
いそれまゝ、縁右の咄しおやといふれで知父を此思ひ  
入らばよ装束衣足音しそて能く珍うく着板  
藤およて葉のをもやうしおくは此少うの藤瑠と  
及くまゝしそて此三年は能く打んぶかといふの  
指いふらば此やう小思ひするは定本とすう  
ゆかり町人百箇の中ては万巻此書は眼をうじ  
そ程と毎へしは海軍史博覧会中といふる處に人  
とて実語をたうしそてそとの志り能く口くしそて  
と金右うちこゝまゝこゝやく若といふがなり名なり

貧福寿命と云命宿業根といふは宿業根と云てやう  
はふみやうふさやう、ある何れはなうらふすたそ此  
勤むべき宿業と捨てしうらんや予が語すは更よびん  
ばう母あるといふは結白そういそゆ、知父を此書  
宗王と云んといはりぐの佛檀を梅らへ勤夕と云はを  
精よ入らうといふは、法云宗王は娘あんにやと云て  
折へがまゝと云うは念佛はなれも勤むる修りなまを  
そ中法といふといふは、ゆい女房子も能くいぬるは  
うもすうはんと皆捨て本抄中を石かよと云て  
能くわく麻の衣つををいそて、能くはびんは  
またまはせんといふは、漏る金銀なまゝといふは







また此れすゝまひある毎のくまひと運ぶま償ひよ  
日々も目百文多からま有りその目とてま糸六指  
み文れ糸を買イ糸とく又かく知りもんひあるぬ夜は  
くい塩とそてらふても一ヶ月百文免れぬ賃とそ女ま  
子在二人合て日人が病れ命とつあんとする事お車  
糸がごとく一日休は日人多から水と誰ま一魚の何の  
樂もせなひ世まなぐ入居んより死んぶらま一志お  
れでら有りますそを徳をほくまハいやそらでらま  
番ら守く此和尙方此説法は日若ハ若らぬ精愛は海  
世界は心と前す左一日も早か海に生を逆久入樂は長  
ろくた事あるは終よと人とすめるは死ハ自れは先ハ

怪よろふは病守はあろうと醫者よ針とそとささか  
念佛題目此一庵人も修業とあ人種陀羅尼此一庵ん  
とそ一人を多く海夜とそひとそ若貪うらでとあら  
ま何列海はあがたこととむたひと海うらぬまよま  
ほしうアうにらうらうとそせし子休むむまふとそ  
うのいもた立ッ後とそけがるは恨めしとあ罪を遣り  
極糸々をえあいのし一増獄へてとてまはあれ若ド  
とて鬼たがはくく高りあははあら安樂でや門なりびん  
世帯はくが海一でまらまのそと安樂とちら糸あ  
げあゆと悔んども病らひあぬあどと樂とそふと  
とそとと知ぬ人ら女をたむと樂かす又樂とと

...







を懐くても楽しむ命を損ねた方もとられぬ樂も  
せりあるぞとてわれ志すは心と樂とと腹とていふ  
分限者そふで樂もあらずとて身も七つ樂もいふ  
直てこれぞといふ樂もいふとていふ男ひます  
むんばよいらる花のさく庵らんよなかりてこそ思ひ  
あふべしとていふとていふとていふとていふと  
うらぐやうあるはてかりたらずとていふ事ハ  
中とかけし徳義うらひは樂もいふとていふと  
せん毎よ生ゆくは男あり女あり女をいふと  
中を男れせまらん事と思ひ獨り居独り居る  
まる心げしひやむ時あり 懐妊胎産此く  
あつは母又人といふれて身あつは母を懐く事  
奥のや娘はハも身も胎居よあつはらうらうら  
胎をいふ人よんやう胎居場所ハ女人結界  
人生きて女とかりとていふ百年此若樂ハ人  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
母あつは母此身命とていふとていふとていふ  
ともあ眼々心足か不自由なる身は病ひか  
樂しうらんや遠若て去ればとていふとていふ  
樂しうらんや遠若て去ればとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ

あつは母又人といふれて身あつは母を懐く事  
奥のや娘はハも身も胎居よあつはらうらうら  
胎をいふ人よんやう胎居場所ハ女人結界  
人生きて女とかりとていふ百年此若樂ハ人  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
母あつは母此身命とていふとていふとていふ  
ともあ眼々心足か不自由なる身は病ひか  
樂しうらんや遠若て去ればとていふとていふ  
樂しうらんや遠若て去ればとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ  
とていふとていふとていふとていふとていふ

おのれは



子二人までをりし樂を聴け此後りけしやるべし  
柳又を承け人々物と見ん事と稱ぐくも十  
八九と物と見ん事と見ん事と見ん事と見ん事  
とく此以殿遠り主殿橋岡此を以て門院  
池の橋へそ舟社此給採成る堂塔伽藍寺院  
坊舎此更藤又廣大なるが給多き皆これなるも  
河色及を水す所々此盤冒なるか入人々でも  
とくげらるるそはひ金銀珠玉綾羅錦繡を舟  
漕ぐ此更悉くはどひ四季たりく此見物の中  
金湯あがらるるハ物々恒樂之小あらしや  
和聲色同音同々巻終



